令和５年度　府中市立矢崎小学校

学校経営報告

府中市立矢崎小学校
校　長　　堀　誠一

目指す学校　「明るいあいさつと笑顔が輝く学校」

～　すべての教職員で　子供たちの挑戦を応援する～

Ⅰ　今年度の取組と自己評価

（Ⅰ）　教育活動への取組と自己評価

①　確かな学力の定着を目指す教育活動の実践

「矢崎スタンダード（学習規律）」を確立し全学級での徹底を目指した。若手教員からベテラン教員まで様々な経験年数の教員が所属する学校において、学年や指導者が変わっても統一した指導方法をとることにより、児童が混乱なく学習に集中することができた。また、指導者が毎学期末毎に行った自己評価により、より徹底した実践となった。

「矢崎置き勉スタンダード」や「筆箱スタンダード」を、発達段階を踏まえて全校として確立し、児童や保護者に統一した説明を行った。そのことにより、持ち物に関する無用な混乱がなくなり、学習に集中する環境を整えることができた。

算数科においてはⅠ～２年生で指導方法工夫改善講師を含めた少人数指導授業、3～6 年生では全単元において習熟度別少人数指導を計画的に行うことにより、児童の習熟や理解に応じた指導を行うことができた。特に個別指導が効果的と考える児童に対しては、週にⅠ度の取り出し授業を行い、基礎基本の定着を図った。

図書担当の教員や学校経営支援員（図書館支援員）を中心にした学校図書館経営と、保護者ボランティアや学級担任による読み聞かせにより、児童がすすんで読書に親しみ、読書を通じて様々な世界や人々の考え方に触れ、自らすすんで学ぼうとする意欲が育ってきた。

GIGA スクール構想の下、一人Ⅰ台端末の利活用が授業の中で活発に行われるようになってきた。低学年であっても発達段階に応じた活用の仕方があることが分かり、タブレット端末に触れる機会を意図的に設定している。大型ディスプレイやタブレット等 ICT 機器の活用による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、更なる実践を重ねていきたい。

朝学習（東京ベーシックドリル・ｅライブラリアドバンスの活用や読書活動）や、家庭学習（学年×１０分）による基礎基本の定着を図る取組を行った。しかし、朝学習の内容に全校的な系統性をもたせることや、学習方法については改善を図る必要を感じている。

毎月の詩の暗唱の取組は、美しい日本語に触れる機会を増やし、語彙を豊かにするうえで大変

効果的であった。毎日のように繰り返し唱えることにより、児童に確かな言語感覚を獲得させることができたことは大きな収穫である。今後も引き続き詩の暗唱に取り組み、学校文化として根付かせたい。

授業改善推進プランの作成に当たっては、新様式に児童の実態に応じたプラン作成を行うよう指示し、実現性のある改善の具体化を図った。また、２学期末・学年末にはプランの検証を行い、改善プランが有効だったという手応えを得て、学校ホームページで成果を公表した。

②　基本的な生活習慣の確立と豊かな心の育成

笑顔であいさつ（語先後礼）を心掛け、感謝の気持ちをしっかりと言葉で伝えられる子の育成を掲げて、全教職員で児童の指導に当たってきた。「あいさつ運動」を１・２学期に１度ずつ計年間２回実施した結果、高学年児童が模範となり、立ち止まって・相手の目をきちんと見て相手意識をもった明るいあいさつを交わせる児童が増えている。児童自ら「矢崎小のよいところはあいさつがきちんとできるところ」と自信をもった発言があった。保護者・地域の方からも、児童のあいさつが「以前にも増して上手にできている」と高評価を得ている。

学年・学級経営においては「温かい人間関係づくり」を念頭に置き、いじめの早期発見と迅速な初期対応に努めるため、児童の生活アンケートを毎月実施した。初期対応では、担任任せにすることなく組織的な対応を行い、重大ないじめ事案に発展することはなかった。アンケートには、否定的な項目だけでなく、友達を肯定的に評価する項目も設け、それらを「ふれあい月間」に全校朝会等で紹介することによって児童の自己肯定感を高める効果が認められた。来年度以降も続けていきたい取組である。

昨年度までサポートルームを常時利用していた児童が年度当初に教室に戻れたため、教室に足が向かない児童は０からのスタートであった。３学期からはサポートルーム専任の人員を確保し、児童の居場所作りに努めた。年間３０日以上の欠席児童は９人に上った。このうち数名は週の半分くらいの登校状況である。登校が困難な児童に対しては、教室の様子をリモート配信で把握することによって、帰属意識を維持することもできていた。登校を促すことは容易ではなかったが、学校から配信する授業の様子をリモートで視聴してもらうなど、学校との接点を維持し続けたため、保護者や児童に安心感をもたせ、手立てが効果的だったと捉えている。

特別支援教育コーディネーターを中心とした特別支援校内委員会を月に１回定例化し、内容の充実を図るとともに組織的に特別支援を進めることができた。府中市教育センターの巡回相談員、府中市子育て世代包括支援センターみらい、SSW、府中市立教育センターけやき教室職員、特別支援教室「ひばり」の担当教員等、関係諸機関との情報共有や連携を日常的に深め、「個のニーズ」に対応すべく、全教職員の共通理解のもと、細やかな児童・家庭支援を進めた。一方、スクールカウンセラー不在の期間が長期化し、教育センターからの派遣された心理士が代替で対応したものの、専任のカウンセラーによる継続したカウンセリングを行うことができず、児童や保護者のニーズに応えることができなかった。

道徳科の授業の学年間交換授業・ローテーション授業を積極的に取り入れた。その結果、専門性を生かした質の高い授業を行うことができ、児童の理解を深めることに繋がった。反面、時間割作成上の制約が生じ、授業変更が困難になっていることは課題である。

交通安全教室・セーフティ教室・水害を想定した避難訓練などを予定通り実施し、安全教育を充実させるとともに、防災教育を実施し、児童自身が自他の安全に配慮して行動しようとす

る意識を育てることができた。来年度は毎月の全校朝会で安全指導を行うなど、一層の充実を図っていく。

たてわり班活動などの異学年交流を通して、人と温かい関係を築き、相手を気遣う気持ちや態度を育成してきた。特に６年生は最高学年として、下級生が憧れる存在として行動で範を示し、年間を通じて各場面で活躍した。各学級では、特別な配慮を必要とする児童に対する理解を深め、自他の良さを認め合う活動を日常的に行ってきた。

③　健康教育の充実と健やかな体の育成

体育科の授業の指導改善を図るとともに、年間指導計画に「持久走」「府中ロープチャレンジ」の取組を位置付け、児童に運動の楽しさを体感させ、運動の日常化を図ることができた。「府中ロープチャレンジ」の取組では、各学級で児童にめあてをもたせ、記録達成に向けて切磋琢磨した結果、どの学級でも運動する楽しさと達成感を味わわせることができた。「持久走記録会」に向けた取組では、帝京大学駅伝競走部の学生を招聘し、第６学年児童は学生とともに走る体験を通して記録会への気運を高めた。

FC 東京スマイルキャラバン（２・４・６年）でサッカー、読売巨人軍出前授業（４年）で野球、心をつなぐキャッチボールプロジェクト（５・６年）で野球、笑顔と学びの体験活動プロジェクト（６年）で車いすラグビーとそれぞれトップ選手を招聘し、専門的な技能を習得する機会が得られた。プロのコーチや現役選手から直接指導を受けることによって、運動に親しむ素地を培うことができた。

体育科の保健領域の学習や特別活動の食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成の学習から、健康で安全な生活を送ろうとする児童の意識が高まった。また、保健だより等を通じて家庭での健康の保持増進に関わる情報を積極的に発信することができた。

３学期開始前の冬季休業中５日間を「メディアコントロールチャレンジ期間」と設定し、スマートフォンやゲーム、インターネットなどのメディア利用時間をコントロールする力を身に付けさせた。家庭の協力を仰ぐ取組のため、家庭間の温度差はあったもののねらいはほぼ達成され、児童がメディアとの付き合い方を考えるきっかけとなった。

④　教職員の研鑽と指導体制の確立

年間指導計画、週ごとの指導計画に基づき、常に計画・実施・評価・改善を行い、教育活動の改善・充実に努めた。定例校長会報告等に基づく職員会議資料を作成し、国・都・市の施策、教育動向を踏まえた校長の方針を職員に分かりやすく解説するように心掛けた。全教職員の共通理解を前提とした教育活動を展開してきた。

児童の実態を踏まえた学習指導を行ってきたが、教科・内容によっては、授業改善を行い、充実した授業を展開する必要がある。今後も教員が明確な目標に向かって見通しをもった教育活動が推進できるようにしていきたい。

学習指導要領の趣旨を生かし、本校の児童の実態により即した「授業改善推進プラン」を作成した。日々の授業実践を通して検証を２回行い、改善点を明らかにした。しかし、児童の学力向上に直結しているとは言い難い。今後も教職員の地道な授業力向上は課題である。

主幹教諭や学年主任を中核とした OJT を日常化し、経験年数の少ない教員や臨時的任用教員の授業力向上や児童理解の育成を図った。また、ミニ研修会を計画的に開催し、若手教員の学

びたいニーズに合致した内容で進めた。

校内研究では研究推進部のリーダーシップのもと、研究教科を全学年統一の国語科に絞り、研究主題を「主体的・対話的に学ぶ児童の育成～国語科「読むこと（説明教材）を通して～」に設定し、全学年での研究授業に取り組み成果を上げることができた。自己申告に基づく授業観察の機会にも、校内研究に関連付け、担任は国語科（説明教材）で授業を行った。授業参観後は指導助言を行ったり、参観シートを渡したりしたことで、お互いに授業力を高めようとする雰囲気が校内で醸成されつつある。日常的により活発に授業参観をし合い、自分を磨き授業力を高めようとする姿勢が求められる。

昨年度より始めた専科教員を交えた拡大学年（ブロック）会を今年度も継続して行った。可能な限り多くの目で児童を見守り情報を共有する体制が整備されたといえる。今後はさらにより内容を充実させ、有意義な話し合いの場としていく必要がある。

⑤　開かれた学校づくりの積極的な推進

今年度５月より新型コロナウイス感染症対策が緩和され、来校者の人数を制限する必要がなくなったため、コロナ禍以前のように多くの保護者・地域の方々等多くの参観者を得て運動会・学芸発表会等の学校公開を開催することができた。また、学校だよりや保護者会、学校のホームページ等を活用して学校の教育活動や校長の経営方針を積極的に発信した。従来の学校だよりに学年だよりを合併して情報の統一化を図り、データ配信したことでより迅速に情報を伝えることができるようになった。また、ホームページの学校ブログを活用して児童の学校生活の様子をよりきめ細かに紹介した。宿泊行事をはじめとする校外学習では特に児童の様子がよくわかると保護者から好評を博した。学校生活の様子を適時伝えたことによって、保護者の不安感を取り除くことにもつながった。

保護者を対象にした学校評価、教職員による学校評価、児童に回答させた学校アンケートをそれぞれ行った。一部の評価項目を統一した内容にしたことにより、３者の意識の違いが明確になった。児童が「できている」と答えた項目のうち、保護者・教職員が「できていない」と考えている項目やその反対に児童より教職員の回答が肯定的である項目が何件かあり、来年度の教育活動に結果を反映させていく必要がある。

２名の地域コーディネーターの尽力により、多数の地域の方々が各学年の体験学習にボランティアとして関わってくれた。スクール・コミュニティ協議会主催事業としての漢字検定と算数検定を１回ずつ行った。昨年度に引き続く取組であったが、漢字検定は７８名、算数検定は１９名の受検者があった。児童の学習意欲を喚起する活動となることから、今後も毎年実施をしていきたい。

⑥　「小中連携・一貫教育の充実」に向けて府中第三中学校・南町小学校との連携

第三中学校区スタンダード「み（身だしなみ）・そ（そうじ）・あ（あいさつ）・じ（時間）・じ（授業）」のもと、小・中学校９年間の「学び」と「育ち」の連続性の推進を図った。本校では「みそあじ」のポスターを独自に作成し、児童に可視化させた。また、毎月の生活指導目標にも「みそあじ」を関連付けることによって、児童への意識化を図った。

各教科・領域における「９年間の学びと育ち」に関する実践では、育てたい児童・生徒像を明確にして年間３回の授業公開を含めた交流を行い、小中連携の日では、授業参観後に全体会・分

科会の運営を計画的に行うことができた。来年度以降は、コロナ禍で中断せざるを得なかった日常的な小中連携の場を増やしていきたい。

（２）　重点目標（数値目標）

①　毎日の学校生活が楽しいと思える児童が９０％以上

児童アンケートでは７８％と、目標を達成することができなかった。この数字は、昨年度と全く同じで、改善が図れなかったことを重く受け止める。今年度も目指す学校像として「明るい笑顔が輝く学校」を掲げたが、授業がよくわからない（楽しくない）、友達関係が良好でないなどいくつかの負の要因が考えられる。児童にとって学校が居心地よく、楽しいと思える学校を構築することが最大の課題である。

②　学校の授業がよくわかり楽しいと思える児童が８５％以上

保護者アンケートでは７１％、児童アンケートでは７８％との回答があり、どちらも目標を下回ってしまった。

本校では昨年度に引き続き校内研究で国語科に教科を絞り、全学年で説明教材での研究を行い、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を目指してきた。また、算数科では全学年で少人数指導を行い、児童一人一人の実態を把握するとともに、児童の実態に応じた指導を行うことにより、躓きの早期解決に努めてきた。

全教科における授業改善推進プランを作成し、年度途中に見直しを行うことによって更なる授業改善を図ってきた。児童が「わかる」「できる」ことを実感することで「授業がよくわかり楽しい」と思えるように、指導方法を見直していきたい。

③　本を読むことが好きだと思える児童が８５％以上

「すすんで読書をしているか」のアンケートで「そう思う」と回答した児童の割合は６５％と目標を大幅に下回ってしまった。「本を読むことが好きか」と問うていたら、結果は変わった可能性がある。アンケートの表記を改める必要を感じた。

読書活動を推進するために、朝の時間に読書をする曜日を設定したり、保護者や担任による読み聞かせを行ったりした。また年間３回の読書旬間を設け、図書委員会児童による企画を通して、読書への興味・関心を高めてきた。

学校経営支援員として図書館担当支援員を１名配置し、学校図書館の環境を整えてきた。来年度も継続して配置し、児童が利用しやすい学校図書館の充実に努めていきたい。

④　家で「１０分×学年」の家庭学習をする習慣が身に付いている児童８０％以上

児童へのアンケートでは７４％と目標に達することができなかったが、昨年度との比較では５ポイントも向上している。向上を前向きに受け止めたい。

一人１台のタブレットが配備されて以来、家庭学習でも自発的活用を促すとともに、学年の実態に応じた家庭学習の課題を出してきた。家庭での学習は保護者の協力が欠かせないため、今後も保護者の理解を得て、協力を要請していきたい。

⑤　自分からすすんであいさつをする児童９０％以上

年度末調査による児童アンケートでは８４％、保護者アンケートでは７４％の結果であった。今年度は「あいさつ週間」の取組を年間２回行い、児童一人一人にめあてを立たせて取り組んだ結果、活発にあいさつが交わされるようになった。目標の数値には届かなかったが、相手意識をもたせてあいさつをする指導をしたため、相手の目をしっかりと見てあいさつができる児童が増えたことをアンケート結果の数字以上に実感している。

また、昨年度の反省から校外における地域の方に対して、もきちんとしたあいさつができるように指導に力を入れた。地域の方からの反響は良好で、指導の効果が認められた。

⑥　学校のきまりを守って行動する児童９０％以上

保護者の９１％、児童の９０％が「きまりを守って行動できている」と回答している。アンケートから、すべての学年の児童が学校や学級のきまりや約束事を守って生活していることが伺える。学校全体が落ち着いていること、学校のリーダーたる高学年児童が下級生に対して模範となる行動を示していることが、良好な行動に結びついていると考えられる。今後も矢崎小の良き伝統として引き継いでいきたい。

⑦　遊んだり相談したりする友達がいる児童９０％以上

児童アンケートの結果は８８％とやや目標値を下回ってしまった。学校の教育活動には授業だけでなく諸行事や給食、掃除、休み時間など様々な活動が含まれている。どの場面であっても、友達の存在は大きいと考える。反対に、それぞれの場面を通して人間関係を構築する機会となり得るため、意識して取り組んでいきたい。

今年度本校では、社会通念上のいじめの認知回数が１件も無かった。いじめ防止の指導を徹底し、いじめを許さない意識を校内に醸成させた成果である。今後もいじめ防止の指導を徹底するとともに、児童の抱える悩みを察知し早期解消に努めていきたい。

⑧　「自分にはよいところがある」と考える児童８５％以上

児童の７４％が「よいところがある」と回答している。令和５年度の学校経営中期的目標で、児童の自己有用感・自尊感情の向上を掲げたが、目標を達成することができなかった。本校では、いじめの早期発見と児童の善行や向上を把握することを目的に「ふれあいアンケート」を毎月実施している。ふれあい月間には全校朝会で児童の善行等を取り上げ称賛する機会をもった。今後も友達の良さや自らの良さを認め合える生活環境を創出するとともに、教職員からの肯定的な評価を行っていきたい。

⑨　自分の安全を自分で守ろうと心がけている児童９０％以上

児童アンケートで９２％の回答があり、目標に達した。毎月１回の避難訓練や安全指導を通して、万一の場合に自らの身を守ることを指導してきた。この結果に満足することなく、次年度は第一月曜日を安全教育朝会に設定し、児童の危機管理意識を高めていきたい。

２　次年度以降の課題と対応策

（１）児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす土台となる学力の基礎基本を定着させることを目指し、朝の時間を有効活用する。また、全教科において楽しくわかる授業を展開するとともに、デジタルとアナログ双方のよさを生かした授業づくりを進める。

（２）温かい言語環境を整え、全教育活動を通して児童に思いやりのある豊かな心を育む。そのために、人権尊重教育や道徳教育の一層の充実を図る。「ふれあいアンケート」を毎月実施し児童の自己肯定感を高めるとともに、いじめ・不登校等の教育課題に対し迅速かつ的確な対応を行う。

（３）コロナ禍の影響により児童の体力面での低下傾向が顕著なため、体力向上に課題がある。体育的行事を計画的に遂行することによって、児童に各種の運動の楽しさに触れさせ、基本的な動きや技能を身に付けさせる。

（４）自らすすんでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるために、全教科・領域において言語活動の充実を図るとともに、校内研究で国語科の学習を通して、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を目指す。また、高・中学年に外国語科及び外国語活動の専科教員を配置し、外国語科・外国語活動を充実させる。

（５）自他の生命を守り、身近な人を助ける能力・態度を養う。そのために、府中第三中学校区・地域と連携した防災・安全教育をさらに充実させる。各家庭配布の防災マニュアルやメール配信、学校ホームページ等を活用して、災害時の情報発信を強化する。

３　予算の活用

①学校経営支援員予算の活用

配当額　３，４７０，０００円 執行額　３，１２５，６７０円（執行率９０．１％）

〇学校図書館指導補助・学習支援・生活及び特別支援等５名の学校経営支援員を配置した。

＜成果＞

・学校図書館指導補助員は、読み聞かせ・ブックトーク・調べ学習の資料集め等、図書館運営全般に貢献した。司書教員を助け、図書委員会の活動にも積極的に支援を行った。

・学習支援員は、個別指導または少人数指導の補助として指導に当たり、児童の習熟の度合いに合わせた指導を丁寧に行った。

・生活・特別支援教育支援員は、特別な支援や配慮を要する児童に寄り添い、心を落ち着かせて学級内外で学習・生活できるように支援を行った。その結果、児童は安心して学校生活が送れるようになった。

＜課題＞

・大きな額の予算が組まれているため、計画的な執行を行い、予算を有効活用していく必要がある。
・年度当初に想定しなかった児童対応が必要になった際、支援員差配の計画変更を臨機応変にしていく必要がある。

②副校長等校務改善支援員の活用

配当額	１，７４０，９６０円
執行額	１，６３２，１２０円（執行率９３．７％）

〇主に副校長からの指示を受けてパソコン業務の補佐をする支援員が２名、印刷業務等教職員の事務処理を請け負う支援員２名を配置している。多岐にわたる業務に対し、迅速に職務を遂行していた。

＜成果＞

・副校長のみならず校務全体の支援を行えるため、教職員からの信頼が厚い。
・副校長の校務改善支援を行うことによって、副校長が教員に対する人材育成を行う時間等を生み出せている。教職員にとっては、教材研究をしたり、学級事務に専念したりする時間及び児童と向き合う時間を生み出せている。

＜課題＞

・副校長が校務全体を見通し、優先順位を考慮しながら教職員の事務量軽減につながるような指示を的確に出せることが欠かせない。

③学校と家庭の連携推進事業

配当額	３４５，６００円
執行額	３４，０２０円（執行率９．８％）

〇昨年度別室登校を行っていた児童３名が年度当初より教室復帰できたことで、今年度から正式に発足したサポートルームの１～２学期の利用児童は皆無であった。３学期はサポートルーム利用児童数名と、不登校傾向の児童対応に支援員を充ててきたが、それほど多くの回数を必要としなかった。配当額に対する執行額が低いのはそのためである。

＜成果＞

・本事業を行うことで家庭と連携しながらきめ細かく丁寧に児童に対応することができた。

＜課題＞

・児童一人一人のニーズに合わせた支援を行うために、適切な支援方法を考える必要がある。
・複数名の対象児童がいた場合、優先順位を付けながら計画的に支援をしていくことが課題である。

④合理的配慮支援員の活用

配当額	１，２２８，２００円
執行額	９５９，３９４円（執行率７８．１％）

〇合理的配慮を必要とする児童が第２学年に１名在籍している。
＜成果＞
・合理的配慮支援員がつねに側に付き添っていることで、配慮を要する児童が安心して学校生活を送ることができている。

⑤音楽活動等振興費

報償費	
配当額	１１２，５００円
執行額	６５，２５０円（執行率５８％）
振興費	
配当額	３５，５００円
執行額	３３，８８０円（執行率９５．４％）

〇本校の特色ある教育の一つに和太鼓クラブの活動が挙げられる。昨年度に引き続き、府中の森芸術劇場において開催された「青少年音楽祭」と「太鼓の響」の二つの演奏会に出演した。和太鼓クラブでは目標に向かって努力しようとする力を育てることをねらいとして活動を行ってきた。報償費にはクラブ活動の時間や朝の時間に活動する際、ご指導いただいた先生への謝礼金である。

＜成果＞
・講師の先生のご指導を受け、演奏会で練習の成果を発揮することができ、児童の達成感につながった。

⑥未来へつなぐ２０２０レガシー委託事業

配当額	１００，０００円
執行額	９８，９４０円（執行率９８．９％）

〇サッカーFC 東京のコーチを招聘し、2･4･6年生を対象としたサッカースクールを行った。また、パラリンピック競技の一つであるボッチャセットを購入した。
＜成果＞
・サッカーの専門家であるコーチからの指導を受けたことによって、サッカー技能の習得をするとともに、運動に親しむ経験をすることができた。６年生児童は、キャリア教育の一環としてスタッフから仕事について講演をしてもらうことで、未来への希望をもつことができた。